

*The Journal of  
Nagasaki University of Foreign Studies  
No.23 2019*

英語教育の中の英学史  
－総合的な学習の時間との関連から考える－

加 島 巧

History of English Studies and English-language Teaching:  
With Reference to the Period of Integrated Study

KASHIMA Takumi

長崎外大論叢

第23号  
(別冊)

長崎外国語大学  
2019年12月

# 英語教育の中の英学史 －総合的な学習の時間との関連から考える－

加 島 巧

## History of English Studies and English-language Teaching: With Reference to the Period of Integrated Study

KASHIMA Takumi

### Abstract

Every university that has a teacher training course was required to modify the contents of the subjects and course descriptions according to the guideline shown by the Japanese Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT). In order to maintain the teacher training course in 2019 and afterwards, a written application was sent to the MEXT in April 2018.

One of the changes shown in the guideline was the introduction of the concept of a core curriculum. By following the concept of a core curriculum, some subjects must be newly introduced. A subject titled “A Period of Integrated Study” is one of them.

For this paper, the field “History of English Studies” was selected, and it is showed how our institution altered the content of the subject in order to follow the MEXT-guidelines. In addition, it is demonstrated how a newly established class was created, combining “Historical Study of English” and “Period of Integrated Study”.

**キーワード：**英語教育、英学史、総合的な学習の時間

### 1. 序

教職課程を持つ大学は、2019年度から引き続き課程を維持するために、2018年までに再課程認定の申請を行った。その際、従来の教職課程を構成する科目群を再構築する必要があったが、下記の二つが留意点であった。

- (1) 教科及び教科の指導法に関する科目については、「英米文学」という範疇が「英語文学」に変更になったこと。
- (2) 教育の基礎的理解に関する科目等については、新しい授業科目に従って、科目の新設や廃止が行われ、「総合的な学習の時間の指導法」が新設されたこと。

また、再課程申請を行う際に注意したことは、カリキュラムの内容について共通の指針の元（コア・カリキュラム）で作ることである。

この小論では、「総合的な学習の時間の指導法」の授業展開を英語教育、特に英学史と結びつけて考えることとする。

## 2. 総合的な学習の時間

総合的な学習の時間については、教職課程のコア・カリキュラムの在り方に関する検討会が平成29年11月17日に公表した<sup>i</sup>ものを元に科目の吟味を行った。これは新設科目である。新しく改訂された小学校、中学校、高等学校の学習指導要領を比較することから始める。

### 学習指導要領

小学校（平成29年度告示）	中学校（平成29年度告示）	高等学校（平成30年告示）
<p>第1 目標</p> <p>探究的な見方・考え方を働か、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。</p> <p>(1) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする。</p> <p>(2) 実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。</p> <p>(3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。</p>	<p>第1 目標</p> <p>探究的な見方・考え方を働か、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。</p> <p>(1) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする。</p> <p>(2) 実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。</p> <p>(3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。</p>	<p>第1 目標</p> <p>探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。</p> <p>(1) 探究の過程において、課題の発見と解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究の意義や価値を理解するようにする。</p> <p>(2) 実社会や実生活と自己との関わりから問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。</p> <p>(3) 探究に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、新たな価値を創造し、よりよい社会を実現しようとする態度を養う。</p>

## 2-1. 総合的な学習の時間の指導法のコア・カリキュラム

総合的な学習の時間の指導法の内容はコア・カリキュラムには以下のように、全体目標で全体像を示されている。全体目標は、(1) 総合的な学習の時間の意義と原理、(2) 総合的な学習の時間の指導計画の作成、(3) 総合的な学習の時間の指導と評価の3項目について、それぞれ一般目標と到達目標が規定されている。

全体目標：総合的な学習の時間は、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力の育成を目指す。各教科等で育まれる見方・考え方を総合的に活用して、広範な事象を多様な角度から俯瞰して捉え、実社会・実生活の課題を探究する学びを実現するために、指導計画の作成および具体的な指導の仕方、並びに学習活動の評価に関する知識・技能を身に付ける。

\*養護教諭及び栄養教諭の教職課程において「道徳、総合的な学習の時間及び特別活動に関する内容」を開設する場合は、(1)(2)を習得し、そこに記載されている一般目標と到達目標に沿ってシラバスを編成する。なお、その場合は学習指導要領の内容を包括的に含むこと。

### (1) 総合的な学習の時間の意義と原理

一般目標：総合的な学習の時間の意義や、各学校において目標及び内容を定める際の考え方を理解する。

到達目標：

- 1) 総合的な学習の時間の意義と教育課程において果たす役割について、教科を越えて必要となる資質・能力の育成の視点から理解している。
- 2) 学習指導要領における総合的な学習の時間の目標並びに各学校において目標及び内容を定める際の考え方や留意点を理解している。

### (2) 総合的な学習の時間の指導計画の作成

一般目標：総合的な学習の時間の指導計画作成の考え方を理解し、その実現のために必要な基礎的な能力を身に付ける。

到達目標：

- 1) 各教科等との関連性を図りながら総合的な学習の時間の年間指導計画を作成することの重要性と、その具体的な事例を理解している。
- 2) 主体的・対話的で深い学びを実現するような、総合的な学習の時間の単元計画を作成することの重要性とその具体的な事例を理解している。

### (3) 総合的な学習の時間の指導と評価

一般目標：総合的な学習の時間の指導と評価の考え方および実践上の留意点を理解する。

到達目標：

- 1) 探究的な学習の過程及びそれを実現するための具体的な手立てを理解している。
- 2) 総合的な学習の時間における児童及び生徒の学習状況に関する評価の方法及びその留意点を理解している。

コア・カリキュラムで規定された項目を元に、次のような授業展開が可能である。本学で作成した

シラバスでは、授業の到達目標およびテーマおよび授業概要を次のように規程した。

#### 授業の到達目標及びテーマ

学校教育における総合的な学習及び特別活動に関する目的や意義、基礎的知識を理解した上で、英語教員という立場での指導計画の立案や具体的な指導法について習得する。さらに、各教科や他の教職員との連携の在り方、学校における様々な集団の特徴に関する知識を身に付ける。これらの学習を通して、中学・高校における総合的な学習の時間及び特別活動、の指導法の目標・必要性・実践の在り方について習得することを目的とする。

#### 授業の概要

総合的な学習の時間及び特別活動における指導の在り方（探究的な考え方や課題解決能力の育成、自己理解の深化及び、集団対応など）の理論的枠組みを提供するとともに、学校現場での実践例などを数多く取り上げ説明する。また、他の教科や教職員との連携や地域との関係、そして学校における様々な集団の特徴を考慮した、年間指導計画の立案、指導法、評価法について学習する。

他の教科や教職員との連携や地域との関係を考慮しながら15回の授業の内、5回の授業（6回目から10回目）を次のように構成した。そして、それらがコア・カリキュラムのどこに対応するかを示したものが次の表である。ここでは、総合的な学習の時間を使って、地域のことを理解するという地域学習の指導の在り方を探ってみる。<sup>ii</sup>

第6回：学校教育における総合的な学習の時間 意義と目的（学習指導要領の内容を含む）

第7回：地域の歴史を総合的な学習に利用する①（指導計画を作成する内容を含む）

第8回：地域の歴史を総合的な学習に利用する②（年間指導計画を作成する内容を含む）

第9回：地域の歴史を総合的な学習に利用する③（指導の実際を学ぶ）

第10回：地域の歴史を総合的な学習に利用する④（情報発信の方法について学ぶ）

項目	(1)		(2)		(3)	
到達目標 ／授業回	1)	2)	1)	2)	1)	2)
6	○	○				
7			○	○	○	○
8			○	○	○	○
9			○	○	○	○
10			○	○	○	○

### 3. 英学史を総合的な学習の時間で利用する

身近な地域を課題にして、学習を進めるにあたり、作家吉村昭<sup>iii</sup>が昭和61年に上梓した『海の祭礼』を利用することとする。『海の祭礼』は昭和61年に出版された歴史小説で、1848年に日本にアメリカから来たラナルド・マクドナルドとオランダ通詞森山栄之助の二人を中心に、その当時の日本を取り巻

く状況を絡めながら、話をすすめている。蘭学から英学へと舵を切る日本の姿を長崎を舞台に描いている。ここでは、指導案に盛り込むべき項目をまとめる。

### 3-1. 育てようとする資質・能力・態度

- ① 読解力
- ② 課題発見能力（地域の魅力発見能力）
- ③ 情報収集・処理・能力
- ④ 文章作成力
- ⑤ プレゼンテーション能力

### 3-2. 授業配分

- 1 時間目：『海の祭礼』の振り返りを行う。
- 2 時間目：『海の祭礼』から問題点・興味のある点を探し出し、その理由を考える。
- 3 時間目：選び出した問題点について調べ物を行う。
- 4 時間目：『海の祭礼』と調べた資料を元に自分の考えをまとめる。
- 5 時間目：発表（プレゼンテーション）をする。

3-3. 単元の評価基準（ここでは、b, c, d が当てはまるが、グループでの作業にする場合は、a も加える。）

a 協働する力	b 課題設定力	c 情報収集能力	d 自己表現力
積極的にグループ作業に参加し、メンバーの意見を尊重しながら統一的な課題に取り組むことが出来る。グループ内での役割分担が出来る。	指定されたテキストを読み、身近な地域やそこに暮らす人々に関心をもち地域の文化や歴史などについての的確な課題を設定することが出来る。	情報にアクセスしながら、その情報中の必要な情報を取捨選択し、活用することが出来る。その際、他人の意見と自分の意見を区別するようにしている。	調べたことや学んだ事や自分自身の考えを、わかりやすく表現するために活用することが出来る。

### 3-4. 授業展開「『海の祭礼』を使って探求論文を書いてみよう」

『海の祭礼』を利用して、地域の歴史を学ぶという学習を行う場合、全15章で構成されている小説の1章から11章までを利用することが考えられる。現在入手可能な三つの版で各章の概要を示し、次に、実際に授業を展開し、最後の発表までの進め方についてのモデルを示すこととする。

章	文春文庫 (新装版)	文藝春秋版 (単行本)	吉村昭自選 作品集第9巻 (新潮社)	章の概要
1	pp. 5-19	pp. 3 - 14	pp. 7 - 19	物語は文化四（1807）年の北海道の利尻島から始まる。ロシア船が島の沖に現れ、島に上陸、略奪を働く。この事件は、レザノフの乗る文化五（1804）年ナデシュダ号の長崎港入港と、その12年前のロシア使節ラスクマンの根室での交渉と関係があった。アメリカの捕鯨船の状況も書かれている。弘化（1844-1847）の時代になると、捕鯨船の接近が多くなっていった。
2	pp. 19 - 52	pp. 14 - 41	pp. 19 - 47	時代は嘉永（1848から）になる。6月に一艘の小舟が利尻島に近づき、一人の男が上陸する。番人小屋での取り調べの様子と、その男が日本語に興味を示す様子が描かれている。その男の名は、ラナルド・マクドナルドであった。
3	pp. 52 - 103	pp. 41 - 81	pp. 47 - 89	ラナルド・マクドナルドの誕生から日本へ渡航するまでが描かれている章であるが、マクドナルドが日本に興味を持ったきっかけが、アメリカに漂着した日本人であったことが注目に値する。彼らは宝順丸の船乗りで、アメリカ西海岸に漂着した3名は、その後数奇な運命をたどることとなる。彼らは、天保8（1837）年にモリソン号で日本に戻されようとしたが、追い返される。このモリソン号には、宣教師としてカール・ギュツラフ、通訳として、サミュエル・ウィリアムズが乗船していた。 <sup>iv</sup>
4	pp. 103 - 133	pp. 81 - 104	pp. 89 - 114	マクドナルドが利尻島に上陸して三日後が描かれている。マクドナルドは利尻島から宗谷へ送られ、その後江差を経由し、長崎送りが決定した。この章で重要な事は、弘化3（1846）年に七名の異国人が択捉島に上陸したことである。長崎に送られた彼らの尋問は、オランダ商館長レフィソンの通訳で行われ、オランダ通詞の本木庄左衛門、檜林鉄之助、森山栄之助が和訳をした。ローレンス号というアメリカの捕鯨船の船員であった。一人が長崎で死亡するが、彼は、悟真寺に埋葬された。残り六名はオランダ船で国外へ送られた。マクドナルドを長崎へ送る前に、十五名のアメリカ捕鯨船ラゴダ号の乗組員を長崎に送ることになったが、彼らは非常に粗暴な乗組員であった。

5	pp. 133 - 146	pp. 105 - 115	pp. 114 - 125	北海道を発ち、長崎到着までが描かれている。
6	pp. 147 - 166	pp. 116 - 131	pp. 125 - 141	マクドナルドの収容先は大悲庵となった。ローレンス号の船員たちの尋問を行った者は、オランダ商館長レフィソン、本木庄左衛門、西与一、檜林鉄之助、西記志十、森山栄之助であった。ラゴダ号の乗組員も同じ形であった。マクドナルドに対しては、本木、西、森山、植村作七郎、中山兵馬、小川慶十郎、志築辰一郎の七名が選ばれたが、長崎奉行与力白井達之助は森山栄之助に注目していた。この章の後半には、森山が蘭英事典をマクドナルドに示し、英単語を学ぶ場面が描かれている。
7	pp. 167 - 193	pp. 132 - 152	pp. 142 - 163	大悲庵に収容されたマクドナルドと資福庵に収容されたラゴダ号の船員達の対照的な様子が描かれている。逃走を企てるなど乱暴なラゴダ号の乗組員に対し、静かに日本語の単語を書きとめようとするマクドナルド。森山らは、アメリカ語について聞き出すのに格好の相手が現れたと思う。日本で最初のネイティブの英語教師が生まれようとしている章である。
8	pp. 193 - 230	pp. 152 - 181	pp. 163 - 194	この章の冒頭で、通詞目付本木庄左衛門が英語修行の通詞達の編成を決定する。(西予一郎(世話役) 植村作七郎、森山栄之助、西慶太郎、中山兵馬、名村常之助、小川慶十郎、猪俣伝之助、志築辰一郎、岩瀬弥四郎、堀寿次郎、茂鷹之助、塩谷種三郎) 一章に描かれた事件からロシア語学習の機運が高まり、次にフランス語の学習を通じに命じる。英語学習のきっかけとなる事件が長崎港で起こる。文化五(1808)年のフェートン号事件である。翌文化六(1809)年に英語学習が始められることになるが、英語の授業は、オランダ商館長の次席であったヤン・コック・ブロムホフであった。ブロムホフから英語を習ったオランダ通詞たちは、文化七(1810)年「諳厄利亜興学和解」をつくり、翌年「諳厄利亜興学小荃」を完成させ、さらに、文政七(1824)年に「諳厄利亜語学大成」の完成を見た(しかし、その辞書には大きな欠陥があった)。

9	pp. 230 - 257	pp. 182 - 204	pp. 194 - 217	ラゴダ号の乗組員の内三名が逃亡事件を起こす。引き続き、絞殺事件が起こる。マウレという名の乗組員は、悟真寺に埋葬された。マクドナルドによる英語教授は続き、森山は、「諸厄利亜語学大成」を持って大悲庵に行き、そこに書かれている発音を直していった。この章では、日本人にはLとRの区別が難しいことをマクドナルドが気づく場面も描かれている。森山の英語は着実に上達していった。
10	pp. 257 - 297	pp. 204 - 236	pp. 217 - 250	嘉永二（1849）年長崎港にアメリカ船が入港する。プレブル号であった。アメリカ人を引き取りに入港したのであった。与力に同行した通詞は森山栄之助が指名された。彼の英語は通じた。今まで長崎に留め置いていたラゴダ号の船員とマクドナルドは、オランダ船で送り返す予定であったが、その船で長崎を離れることとなった。
11	pp. 297 - 326	pp. 236 - 258	pp. 250 - 274	嘉永三（1850）年蝦夷地から三名の船乗りが長崎に送られてくる。アメリカの捕鯨船ボーケホンテス号の乗組員であった。最初オランダ語で話しかけた森山栄之助であったが、通じないと見ると、英語で話しかけた。三人の顔に笑顔が浮かんだ。オランダ船で彼らを送り出した後、森山は辞書の編纂に没頭する。その第一冊は翌嘉永四（1851）年「エゲレス語辞書和解」と名付けられた。日本を取り巻く状況を、オランダ通詞森山栄之助とラナルド・マクドナルドを中心に描いたこの小説は、1807年の出来事から始まるが、すでにその時点でこれからの歴史の流れを予感させるものがあつた。この章の最後は、アメリカ大統領フィルモアの国書を持ったペリーが日本に向けてアメリカ東部のノーフォークの港を出る場面で終わる。
12 - 15	pp. 326 - 476	pp. 259 - 377	pp. 274 - 399	ペリーは日本に向かうにあたり、中国語の通訳として第三章で触れたサミュエル・ウィリアムズが同行することとなった。森山栄之助は、ペリーが二度目の来日をする嘉永七（1854）年には主席通訳として任に当たった。日本に開港を求めた理由の一つは、捕鯨船の保護であったが、ペリーの来航した嘉永六（1853）年に最盛期を迎えたアメリカの捕鯨業は、石油の発見で急激に衰えていくこととなる。

あと がき 等	pp. 477- 481	pp. 379 - 382	pp. 400 - 402	
解説 ・ 後記	pp. 482 - 489		pp. 499 - 501	

実際に授業を展開する際のモデル案

1. 『海の祭礼』を読み、興味を持ったトピックを一つ選ぼう。

1. アメリカの捕鯨の歴史
2. ラナルド・マクドナルドの生涯と長崎
3. 宝順丸の漂流

2. 選んだトピックに関連する部分を抜き出してみよう。

1. 1820年（文政三年）、清国からハワイへ向かうアメリカ商船が、日本近海におびただしい数の鯨が群泳しているのを目撃し、捕鯨基地になっていたハワイにそれを伝えた。新しい漁場を求めていたアメリカ捕鯨船は、争って日本近海に出漁、イギリス船もそれを追っていちじるしい漁獲量をあげた。アメリカ船は日本近海に年間百余隻も出漁し、イギリス船も十隻前後を数えた。（第1章）
2. ラナルド・マクドナルドが初めて日本という島国を強く意識したのは、レッド・リヴァ・アカデミーで学んでいた1835年の秋であった。（第3章）
3. マカオに駐在していたアメリカの貿易紹介オリファント商会の支配人キングが、これら七名の漂流民を利用して日本との交易を得たいと考え、布教をねがう宣教師もこれに同調し、オリファント商会の持船「モリソン号」に岩吉らを乗せて日本へむかった。（第3章）

3. なぜ興味を持ったのか考えてみよう。

1. 鎖国政策で、一部の国と一部の場所でしか外国との交流が無かったと思っていたから。
2. 蘭学から英学に変わった状況を知りたいから。
3. 漂流して外国にたどり着いた日本人は他にも居たのでは無いかと思ったから。

4. 選んだトピックに関して、背景知識を調べてみよう。

1. 捕鯨船と日本の開国を調べるには、中浜万次郎（ジョン・万次郎）のたどった数奇な運命を調べ、比較してみる必要があるのではないだろうか。
2. ラナルド・マクドナルドは日本で最初のネイティブの英語教師となった訳であるが、それまでの日本の英語教育は蘭学を通してのものであった。
3. モリソン号で帰国を待ち望んだ日本人漂流民がたどった数奇な運命と、宣教師らも日本開国に関わっていたこと。

5. 調べた背景知識を基に考えられる仮説はどのようなものか考えてみよう。

1. 捕鯨船が日本沿岸まで来ていたことは、日本の開国を迫るアメリカの理由の一つになるのではないと思う。これは、作家ハーマン・メルビルも『白鯨』の中で触れている。それに加え、宣教師の海外布教の動きもあるのでは無いと思われる。日本では、それが長崎を起点にして国中に広まったのでなかったのか。
2. 長崎は、遊学の町として、日本全国から人々が最新の学問を学びに訪れる場所であったが、それまでの蘭学中心から英学へと変わったのは、1808年のフェートン号事件がきっかけであったのではないだろうか。オランダ商館員を英語教師として日本で最初の英和辞典を作成したが、それに関連したオランダ通詞にラナルド・マクドナルドは大きな影響を与えたのではないだろうか。
3. 宝順丸の漂流民のたどった数奇な運命と、帰国出来なかったが、彼らは聖書の和訳で重要な役割を演じたのではないか。また、彼ら以外にも日本の近代化で大きな役割を演じた人物が漂流民の中にいたのではないか。

6. 仮説を証明するために調べ物をしよう。

1. ハーマン・メルビル『白鯨』
2. 「もしも、長崎が日本の中心だったらなら」NHK2019年7月12日放送  
「世界不思議発見」TBS2006年12月2日放送
3. 三浦綾子著『海嶺』（上・中・下）（角川文庫）  
海嶺 [DVD]

7. 選んだトピックについて調べたものを参考に、自分の考えをまとめ、発表の準備をしよう。

最後のプレゼンテーションを行うために、次のワークシートを使用する。

序論（導入）

↓

本論

↓

結論

## 参考文献

### 4. 最後に

「総合的な学習の時間の指導法」を英学史と関連付けて指導する授業展開を紹介した。指導の際に使用するテキストは吉村昭の小説を元にして行ったが、この小説は江戸時代の北海道から始まるのだが、物語の舞台は長崎に移る。このテキストを読み、そこに書かれていることから興味のあることを見つけ、少し調べてみることで、長崎に関連した歴史のダイナミクスの一面を知ることができよう。このような地域に密着した指導法は教科を越えた取り組みを行う際のヒントにもなるのではないだろうか。担当教員はこれから指導技術を学ばなければならないが、色々な教育委員会が素晴らしいヒントを提供してくれている。この論を締めくくるにあたり、岡山県総合教育センターがその一つであることを書き添えておく。<sup>v</sup>

## 参考文献

天野敏枝（他）（2018）*CNN Workbook Intensive Course 2018* 朝日出版社

村川雅弘他（2018）『[教職課程コア・カリキュラム対応 大学用テキスト 理論と実践の融合] 総合的な学習の時間の指導法』日本文教出版

日本英学史学会編（1982）『諳厄利亜興学小笙』・『諳厄利亜語林大成』（長崎原本影印）大修館書店

鈴木俊裕（編）（2012）『高校生のための「研究ノート」総合的な学習・課題研究で育む新たな学力』学事出版

## 文献解題

吉村昭：『磔』（1987年文春文庫）この中に修められている「三色旗」は1808年に長崎港で起こったフエートン号事件を扱っている。この作品集は、吉村昭自選作品集第9巻（1991年新潮社）にも修められている。

吉村昭：『海の祭礼』この小説は、月刊「文藝春秋」昭和59年8月号から61年9月号まで連載され、連載終了後に単行本として出版された。文庫本で現在入手しやすいのは、2004年の新装版である。吉村昭自選作品集第9巻（1991年新潮社）にも収められている。

三浦綾子：『海嶺』宝順丸の遭難でアメリカ西海岸に漂着した岩吉、久吉、音吉の数奇な運命描いた小説である。彼らの運命は想像を絶するものであった。熱心なプロテスタント信者であった著者がなぜこの作品を書いたのか。その答は、この作品を読めば理解できると思う。角川文庫版だと、現在入手できるのは、2012年の改版である。

## 注

<sup>i</sup> 教職課程コア・カリキュラムの在り方に関する検討会 平成29年11月17日配信  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/002/siryo/\\_icsFiles/afieldfile/2017/12/08/1399160\\_05.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/002/siryo/_icsFiles/afieldfile/2017/12/08/1399160_05.pdf)  
(2019年9月5日閲覧)

- 
- ii 岡山県教育センター（編）「中学校における地域学習に関する研究―社会から総合的な学習の時間への発展―」 p. 1
  - iii 吉村昭1927年（昭和2）―2006年（平成18年）
  - iv 加島巧「プロテスタント宣教師―幕末、明治、そして長崎―」『長崎外大論叢第17号』2013年 p.171
  - v 岡山県総合教育センター「総合的な学習の時間」<http://www.edu-ctr.pref.okayama.jp/gakkoushien/sougou/index.html>  
(2019年9月24日閲覧)